

(4) 異邦の女

トラークルの妹グレーテは、興味をひく人物、いやそれどころか異様な人物である。彼女の性の陰鬱な輝きが、詩人の魂を明るくしたし——あるいは暗くしたのである。詩人の生活の舞台上と、空想力における女主人公なのである。トラークルはグレーテを伝説的形姿に変え、神秘化した。文学的比喻の中に両者の魔神的官能性を隠し、おのれとグレーテをあらゆる性的なものを除去した一人の双性人間に融合した。例えば青年と若き女、異邦人と異邦の女、修道士と修道女である。死に至るまでトラークルは彼女に《忠節を通した》——最後の詩作品もなお彼女に呼びかけ、彼女を魔術で呼び出している。トラークルが生涯思いめぐらし、賛嘆していた彼の神に見捨てられたのがわかったとき、この神がガリシアの屠殺場で無の中に溶解したとき、彼に残されたただ一つの意味を持つ現実には妹だった。トラークルの終末にあるのは、虚構ではなく一人の人間なのである。グレーテ・トラークル保存のわずかな手紙に目をとうしてみると、もっと具体的に言えば、それらの手紙の中に入り込んでみると、次のような考えに襲われる。まったく創造性に欠け、トラークルよりも力を持ち、より男性的で、ひょっとするとより天才的でさえある彼女は——当然ながらその根本に破壊的な天才的素質を有していたという考えである。彼女は情熱的で、激烈な御し難い女性として記述される。幼時の写真では粗野で・暗い顔つきをしており、《その態度の少女らしからぬ落ち着きという点で、攻撃的な印象を与える》(シュペリィ)。すでに子どもの時からゲオルクとの類似は著しい。後になると更にこの類似性が強まる。大きな力強い鼻が広くて骨太い顔に見え、顔の諸特徴は活力と官能性を語っている。シュペリィはその点に《問題的放蕩者の表情と並んで男性的特徴》を見いだしているが、疑問の余地なく正しい。なかんずくゲオルクも、この無骨で無愛想な顔から輝きで、男性的本質と精神を認識していたに違いない。それというのも、〈異邦の女、修道女、若き女〉といった特別グレーテにふさわしい男性的形姿の女性的変容を考え出しているからである。こういう系列を更に考えることが出来よう。魔神の女、月の女、死の女(フォン・ラ・モール)。ハイデッガーは冒頭で言及したトラークル・論考の中で、〈いつも妹の月の声が響きわたる 精神の夜を通じて〉という詩行と関連して、実際「月の女」(セラナ)について語っている。月の女の輝きのまわりで星々は、古代ギリシャの詩句のように《青ざめ冷たくなる》と。

トラークルは妹を詩の鏡像世界の中へ取り込み、彼女を自分自身に変身させた。これは両者を結び付け、具体化し、肉体化すると同時に精神化する一種の神秘的合一(ユニオ・ミスティカ)である。近親相姦・行動において成就される身体的合一化は、精神的なものほど完全で満足できるものではないから、ここでは大して重要でない。それでもやはりトラークルはグレーテの身体的不実さに苦しんだ。ブッシュベックは恐らく1912年にはすでに、グレーテとの短期間ではあるが劇的とも言える恋愛関係にあった。トラークルはかなり後になってそのことを知ったようだが、冷淡な沈黙を守り通し無視した(幼なじみブッシュベックとの最後の手紙の上での接触、ヴィーンからのトラークルの絵はがきは1913年8月15日の日付になっている)。ブッシュベックは対談の中で、兄と妹の間に事実として(デ・ファクト)認められる結合があったことを、常に否定している。ゲオルクの罪の感情と抑鬱は、幾度となく犯された《思想的罪業》に起因すると述べているが、これはまったく非現実的な論証である。

この数十年の流砂に覆われた痕跡を辿ってみると、身近かな関係者たちが皆——特に生存している家族の者たち——わずかな痕跡を消し去ろうとして、さらに一層の努力を払ったという感じを拭いきれない。だからゲッチンゲンのトラークル・研究者たちは、手紙を搜索する過程で、そのような自己証言が多かれ少なかれ、不可解にも消失しているのに何度となく遭遇した。高校教諭ハンス・スツクレナールもそうだった。《1899年から1900年までの未知数の手紙の行方は不確かだ。陸軍少佐フリッツ・トラークルはそれを1926年ルートヴィヒ・フォン・フィッカーに売りに出したが、駄目だった。そのとき問題になったのは、察するところトラークル家の家族の者たちに宛てた手紙だったろう。》そして《ゲオルク・トラークルの遺稿に関する一時的な報告》(オイフォリオン、54号、1960年)の別の所で、スツクレナールは次のように書いて

いるが、この報告は補遺情報によって（テキストとクリティーク、4号、1964年）今では完結している。《この紛失で恐らく最も悔やまれるのは、トラークルが妹グレーテ・ランゲンに宛てた手紙も失われたと見なせることだ・・・他人が遺稿を覗くのを不承不承認めたことは、ある程度まで理解できるが、この無頓着さは（それと一般的に対立するのが、これら文書類に対するトラークル家の家族の態度である）永久に不可解であろう・・・さらに疑わずにいられぬことは、ザルツブルクの家族の者たちが、詩人お気に入りの妹グレーテ・ランゲンの手紙などの遺稿を、十分本気で保管しようと努力したのかということだ。疑いようもなくそこにはトラークルの少なからぬ草稿が一一少なくともやはり手紙であろう一一含まれていた。ある種の疑念にもかかわらず、家族は、彼女の夫A・ランゲンの説明、遺稿は彼が仕舞い込んでいたベルリンの物置から盗まれたという説明で満足せざるをえなかった・・・しかし次の二つの場合、豊富な自筆の資料を当てにはできようが、確かな証言とする事はできない。即ちカール・ボローメウス・ハインリッヒの場合とトラークルの妹グレーテ・ランゲンの場合である。》あのすでに言及した心的に重大な危機にたつ作家、カール・ボローメウス・ハインリッヒとトラークルはインスブルック時代、兄弟同様の交際をしており、秘密を持つことはほとんどなかったといつてよい。だからスツクレナールの遺稿報告を読むと《一般的な焚書》という奇異の念が伴う。《かなり早い時期》の両詩人間の文通の一部には、該当したかもしれぬだろうが。

こういったすべてに対して、詩人のもっとも身近かな近親者たちが彼のグレーテに対する関係についてはいつも厳しい沈黙を守るばかりでなく、外部者の示唆的試みを芽の内に摘み取り、自分たちは近寄り難い位置へ引きこもってしまう事態が生じている。そこでヴォルフガング・コルダンは家族の住居訪問について次のように報告している（《行為》1950年5月6日）。《確かに会話は難しいし、退役陸軍少佐氏は用心深い。彼には彼なりの理由があるのだ。ここには押しつけがましさがあつたし、思い違いの観察からすぐに小説をつくりあげ、しばしば詩的に呼び出された今は亡き〈青白き妹〉をセンセーショナルな関連の中に据え、ゲオルクのバイロンの情熱を捏造する無責任さがあつた。》これは恐らくヴェルナー・リーマーシュミートのトラークル・小説、雰囲気のないわばトラークルの語彙構成要素からつくられた散文芸術作品を意味していよう。まさしくゲオルクのグレーテに対する関係を一一〈彼の頭は黄昏ゆく部屋のなかで偽りと淫猥に燃え尽きた〉というトラークル自身とは反対に一一遠慮がちに書き換えているだけで、これほど詩人の性格と精神構造をぶち壊す文章は他にはない。

この主観的には理解できるものの客観的にはほとんど許されぬ態度によって、トラークルの兄弟姉妹は、ジャーナリストあるいは悪くするとグラビア新聞の《特ダネ》記者たちの手管とはこれっぽちの関係もない、あの厳密に学問的努力を見せた人物をみな刑事の役割へ追いやってしまったが、そこではやはり犯罪が問題なのではないし一一ゲオルクによるグレーテの麻薬への誘惑を度外視すれば（しかしそれさえ暴力的行為ではなかった）一一犯罪の結果を問題にしているのでもない。これはグレーテの美しい許しの言葉を出してみれば一層はっきりする。《ユリを見るがよい。雄しべと雌しべは一本の茎にできていないか？雄しべと雌しべを産んだ花が両者を結びあわせないのか？そしてユリは純血の象徴ではないのか？ユリの兄妹の合一は実りのないものなのか？もし自然がそれを嫌うなら、大声をあげ口に出すはずだ。》

テオドール・シュペリィは精神科医として、当然のことながら特別詳細にいわゆるグレートル・コンプレックスについて考究した。そして力を込めてこう指摘する。トラークルの《人目を引く謎に満ちた人格が伝説形成への契機となったのは当然で、彼の常軌を逸した品行について、一方では野蛮な噂が広まり、他方で彼の生活を聖徒伝にこじつける傾向がある。二つの方向は詩人の贗造を意味する。これを防ぐには、ただ彼の現実の独自性を先入観なく記述する以外にはない。》シュペリィはその際、研究者の公平さであの詩人の近くにいた人々さえも保護する。彼らは一度は《自分たちの深淵を包み隠し、ある種の性癖や事件を見過ごしたり本当だと思いたがらなかった》、生き続けるトラークルになお一層その使命を果たさせようとして。しかしながら50年以上経た今日

では、死者に対しこのような《精神療法》は役にたたないと、シュペリイは述べる。むしろきわめて僅かな修正でも、それは《トラークルの人間的現実の限定を意味し、その現実が現在の者にとって気持ちのよいものであるにしるそうでないにしる、恩寵と危険をはらむ過去の現実なのだ。》

この偉大な、そして偉大さのなかで悲劇的な詩人の精神に何らかの異常を探り、明らかにすることが、われわれトラークル・研究の目的であってはならない。ただ一つだけ言えば、トラークルは聖者とはあらゆる点で異なっている。特に晩年の2年間、時折見られる禁欲は、かなり早期の生活段階における《倒錯》同様、この非凡な人間の精神的態度に属するもので、両者は素質や周囲の世界や社会的由来によって病理学的に刻印された途方もない人間の相反する極端性なのである。われわれは調査を進めるなかで、トラークルの手で公表されなかったりあるいは検閲された文書を覗くことができた――ただし専らザルツブルク時代に関係あるもの――またかつての学友たちの意味深長な発言も聞いたが、それはまったく粗野な性的事件における詩人の強烈きわまりない官能性、否それどころか自制心のなさや生活の退廃をうかがわせる。なんといってもこの若者の顔を観察してみるがいい！それはロディオ・ラスコールニコフの顔つきではないのか、だが同時に《放蕩者》スヴィドリイガイロフのそれでもないだろうか――《黒すすと蜘蛛の巣だらけの木造湯屋風の》部屋たる永遠について語るあのスヴィドリイガイロフの？

そこである退屈なプロテスタントのクリスマス祝宴のあと、続きは団体で――だから友人何名かと――ザルツブルクの娼家で行われたが、野蛮な、とても書き表せぬような場面が演じられたのである。放火狂的学生のいたずらだった。トラークルは積極的に参加したわけではなかったものの、やはり異議を唱えることもなかった。それについては証拠書類がある。[ブッシュベックに宛て封筒に入れて送られた日付のない葉書の本文や猥褻な素描は、ココシュカに対する挑発的からかいも含んでいた――友人たちに、この《野獸的》画家の強烈な擁護者として知られていた受取人を冷やかす意図がありありとしている。多分それと関係あるのは、1909年2月7日ザルツブルクからヴィーンのトラークルに宛てたブッシュベックの手紙の追伸であろう。《何といっても一度芸術展へ出かけてみたまえ。そうすれば君はきっと、君の泥酔したような絵はがきのかわりにずっと芸術的な作品への刺激をうけるだろう、ココシュカの方向で！》] そのほかにも、彼の手になる少なからぬ猥褻な（あるいは反セム的）言葉がある。後に価値ある文学形式で十分な成熟を見せる段になると、彼は猥褻な言葉をひどく嫌ったと言われている――彼のいるところでは淫らなことは言えなかった。そして女性については、売り子嬢についてさえ、彼は常に尊敬の念、否それどころか尊崇の念を抱きながら語ったのである。

シュペリイが次のように書くとき、上述の娼家場面――なかでもその一場面――を暗示しているようだ。《トラークルは早くから娼婦たちと面識があった。シュトライヒャーやハウアーとの交遊、またボードレール、ランボー、ドストイェフスキーの読書などがそれに役だったのかもしれない・・・しかし彼は専ら、年老いてやつれ果てた女性に引かれるのを感じたと言われている。その女性のそばに何時間も黙したまま座りながらぶどう酒を飲んだり、あるいは熱に憑かれた独り言を述べるのだった。本来の関係には至らなかったそうだがわれわれの知っている一場面は、そのわき道的関係という点で、トラークルの特性を示し精神医学的にも得るところが多い。同様に変態色情者に似た出来事や、種々の攻撃を逃れられぬ酒場女や女中たち等々との関係を記述することは差し控えねばならない・・・とりわけ『ソーニャ』や『アフラ』詩から明らかになるように、娼婦たちは、彼にとって性的なものを超えており、＜蔑まれた者や辱しめられた者＞に対する一象徴だった。[貧困からわが身を売らねばならなかったソーニャ（マルメラードヴァ）は、ドストイェフスキーの《罪と罰》の主要人物の一人である。アフラはアウグスブルク地方の聖女で、伝説によれば、元々身体を見も知らぬ男に任せる寺院の女奴隷だったが、二人の僧ナルチスとフェリックスに導かれキリスト教に皈依した。改悛した娼婦たちの守護聖女と見なされている。彼女の属性は松かさ、

つまり男性的性の象徴である。] だから謝肉祭の期間中だが、カフェー・トマゼリィでカーニバルのドーナツを食べていると突然立ち上がり、ユダヤ人街の娼婦たちにもその菓子を持っていったのも理解できる。》しかし詩人が単に文学的あるいは人道的諸理由から娼家を訪れ、極端な性の屈辱にある女性たちに慰藉を与えたという想像は、トラークル・聖徒伝作者たちの特徴であるあの殊勝な願望思考に属する。反市民的な衝撃的方向を見逃すことは決してできぬし、密かには、父の家の《裕福》やそこでの性的行動の家庭的タブー化への反抗も目指していたであろう。

何れにしろトラークルの生涯には恋愛的（肉体的心理的）優性を占めるただ一人の女性も存在しなかったのは、明白である――グレーテを除けば。ブルックバウアーが語っているように、妹は彼にとりすでにギムナジウム時代から〈最も美しい少女、最も偉大な芸術家、最も稀有な女性〉だった。妹については常に《内面的必然性から讃美し》口に出した。彼がヴァーグナーの《ヴァルキューレ》における近親相姦讃美をはっきり弁護した点では、青年時代の友人たちの報告も一致している。

第一章でトラークルの妹に対する関係はすでに早い時期に生じていたようだと言ったが、この関連で特別残念なのは、兄妹が数年間互いにやり取りしたと思える手紙がすべて失われていて、取り返ししようのないことである。あるいは――これはずっとありそうなことだが――第三者の手によって破棄されたということである。1900年から1905年夏のカルマルに宛てた、あの最初の保存されている手紙までの空白期間が、たいそう痛く感じられる。

ほかの二人の姉と同様、グレートルもたびたび父の家の外で生活した。11歳の時、母の勧めで聖ペルテン（低地オーストリア）のイギリス女性寄宿舎へはいり、そこで市民学校へ通った。続いて2年間、ウィーンのブルクガッセにある若い娘たちの教育施設ノートル・ダム・ドゥ・シオンで過ごした。だからこの若いプロテスタント、グレートルが卒業した学校はどれもカトリック女性聖省に所属していた。1908年の秋ゲオルクが大学での勉強を始めたときには、グレーテはまだウィーンに居なかった。ゲオルクに従ってようやく帝国の首都へ赴いたのは、17歳の時、それも1909年9月のことで、音楽アカデミーで理論を、ポール・ドゥ・コンヌのもとでピアノを学んだ。

ただ兄妹のウィーン時代は（比較的短期間だが、それというのもグレーテはまもなく両者には不幸なことに、ベルリンへ引っ越したのである）かなり妨げられず接触できた。グレートルはゲオルクから離れて住まった。そしてマリア・ガイペルの証言によれば、ゲオルクが妹に再三再四麻薬の世話をしたのは、まさしくその頃だったそうである。恐らくは、すでにザルツブルクで染まっていたこの悪習に溺れたのである。兄の中毒と平行し、以後深みへ深みへと。いや薬物に対する情熱では、彼女の方がゲオルクを遥かに凌いでいたように見える。

あのウィーン時代、トラークルは熱病的爽快感と恐ろしい幻滅状態が急激に交替することがあったが、これは決して神経を消耗させる兄妹相互の関係が原因なのではない。グレーテを生涯《やさしく同時に怒りつつ世話》（ブッシュベック）したトラークルは、妹を毒物へ誘惑することで、自分の引き起こしたことを日々目にしていたであろう。そこでルートヴィヒ・フォン・フィッカーが《妹の犠牲像、彼自身の（つまり詩人の）磔刑の影》について語るとき、深遠なものに出会うのである。麻薬中毒女グレーテは、その頃ほかの者にも麻酔薬の施しを請うた。例えばブッシュベックに宛ててこう書いている。《・・・私は阿片のためにあなたを煩わしたりしません――もっとも近日中にそれを調達なさを心から望んではいるのですが。私には何か恐ろしいことが起こりました。ゲオルクの顔と気分には私の苦痛の一部が、ほんの少しですが、映し出されているのがおわかりになるでしょう・・・》

まったくゲオルク同様グレーテも両親の家を合間合間に訪ねては滞在し、休暇にはきまってザルツブルクで過ごした。父親の死後――1910年晩夏――エルンスト・

フォン・ドーナンのもとでさらに修業を積むため、彼女は住所をベルリンに定めた。そしてハンゼン婦人経営のヴィルマースドルフの下宿で、この婦人の甥にあたるかなり年長のアルトゥル・ランゲンという、自称書籍商の男と知り合った。〈そして妹らは暗い庭の骨だらけの老人たちのもとへ逃れていった〉という詩行が、グレーテとオーマリア・ガイペルが言うように、巨人のようなオーマリア・ガイペルに〈この男に何か関係があるのかどうかは〉（グレーテは20歳にもならぬ1912年7月17日、ベルリンで彼と結婚した）決めかねるが、シュペリイはそう推測している。

トラークルは妹に対して精神的な、しかし確かに性的な面でも隷属関係にあったが――この意味で兄妹は時々役割を取り替えたのである――（この隷属関係は、神秘的なほど彼によく似た被造物、妹への深い情熱から出ていた）、一方ではより世才に長けている反面、他方では遙かにだらしない自制心のないグレーテは、その関係を忠実に受け入れた。しかも見るところ、必ずしも確かではないが、すでに早い時期からで、ゲオルクはこのことに大層苦しんだようだ。1905～1906年の一幕物『死の日』は――ゲオルクは19歳、グレーテ14歳――嫉妬妄想をほとんどカムフラージュすることなく描き出しているが、このことについてはすでに言及した。だからこの幼稚な作品の紛失は、伝記的見地からも悲しむべきことだ。盲目のペーターという若者から情熱的に愛され、生活を楽しむ若い娘の名はグレーテである。俗語では、盲目のという形容詞は、愛、情熱、なかでも嫉妬に付される。ペーターはグレーテの愛を《盲目的に》信じていたが、欺かれているのを知ると、発作的に狂気に捕らえられ自殺する。われわれがすぐ見て取れるように、ペーターはゲオルクをカムフラージュする名前である。しかしひょっとすると、詩人は妹の名前を復讐欲求から変えないままにしたのかもしれない。意識的にかあるいは無意識かはどうでもいいことだが。

8年後トラークルは、流産で重い病に伏せていたグレーテ・ランゲンをベルリンに見舞って間もなくの頃だろうが、発見者ヴォルフガング・シュネーディツに《晩年の戯曲断片》と呼ばれた、対話体のあの素晴らしい幻覚を書いた。それは少なからぬ箇所ではキュクロプス的・爆発的であるが故に、言語的にはまだ不器用だが、それだけに一層、叙情的後期散文作品『啓示と没落』の力強い前形式なのである。（戯曲断片の焼け付くような原風景に対して、散文詩は冷えた溶岩のごとき印象を与える。）この《戯曲》の人物たちは、深い恍惚状態に捕らわれて言葉を語る。その語り口は被催眠者の痙攣的吃りのように響く。この戯曲は――トラークルにとって別のものがどれほど可能であろうとも――家族的、血族的《主題》を持っている。なんとはなしに次第に途切れゆく音響体を思わせる、仮面を付けた私的神話、それがこの断片だ。そしてここでは、トラークルに身近だった人たちについてフィッকারの述べている言葉が、前よりも一層価値を有する。彼らは《神話的悲劇の運命的人物のようだ、彼自身はこの悲劇で主役を演じなければならなかった。》

その人物たちは〈ヨハンナ、幻、ペーター、ケルモール、小作人〉である。序幕の舞台は〈茨の荒野〉をあらわし、第一幕は〈小作人の小屋で〉演じられる。グレーテは今回は本当の名前では登場せず、ヨハンナと呼ばれる。世俗的で魔神的なヨハンナについて、ペーターはこう言う。〈おお茨の繁みで歌う妹 血がその銀色の指から滴り落ちる 蟻のような額の汗 彼女の血を飲むのは何者か？〉ヨハンナが〈かわいい妹〉と話しかける幻はグレーテ・自我の分裂、放射だろう。見極め難い混乱を見せるこの戯曲では（それは事実、同じ時期に描かれた自画像の文学的ペンダントである）、ゲオルクは再び1906年のペーターというカムフラージュされた名前で登場する。ヨハンナと同じく、彼もまた二重・自我として現れる。ある時はペーターとして、別の時にはケルモールとして、譚詩風の騎士的人物と犯罪者の人物なのである。ケルモールは夜間、小作人の小屋に入れてもらおうとする。つまり父の家に、というのも小作人はトビアス・トラークル以外の何者でもないからである。小作人はペーターを〈陰鬱きわまりない息子〉、〈石だらけの畑地のへりに〉腹をすかして座している〈乞食〉と名づける。そしてヨハンナ・グレーテを〈娘〉と呼ぶ。すなわち〈夜風に響く白い声 紫の巡礼の支度を整えて おお私の血から流れる汝の血よ 月夜の中の小道と夢見る女〉。〔白い声はグレーテ

を識別する目印で、『啓示と没落』では白い声が詩人に〈死ね！〉と命ずる。マールホルトの見解によれば、トラークルは再三再四自殺を考えたのである。《恐らくは妹にも励まされ、一緒に心中することを》。] ペーターはトラークル・心情の明るい意識的な領域、いわば自我を具体化している。ケルモールはその暗い夜の領域、眠りに捕らわれ本能によって決られる領域、いわばイドである。ペーターは同情心、あるいは思いやりの心からヨハンナの話を話すのに対し、夢に捕らえられた地点から語るケルモールは、赤裸々な欲情と嫌悪感も見せながら応答する。〈・・・氷のヴェールに覆われた星たちの顔 歌をうたう異邦の女——わたしの心に暗く波打つ・・・少女 星たちの池で燃え立つおまえの胎内——・・・よしてくれ——黒い虫が紫の心臓に穴をうがつ！ 衰えた月が砕けた小石の中をついていく——・・・〉（ケルモールについてペーターは身震いしながら言う。〈彼のこめかみは血を流している〉。そして小作人はケルモールを〈私の家に立ち寄った恐ろしい神〉とも呼ぶ。）ケルモールは混迷状態から目覚める。そしてヨハンナが彼を誘惑しようとする（〈夜風の中の笑い声〉）。覚めた目に彼女とわかると、ケルモールは大きな叫び声をあげる。〈腐敗と暗闇に潜む茨の階 紫の地獄の炎〉——しかしそのとき、夢遊病の女もネメシスのように〈高く立ち上がり〉、彼に呪いの言葉を投げる。〈おまえは血塗られている——だとすれば、おまえは私の眠りの中へ押し入ったのだ。〉 われわれがここで目にしているのは、人をも殺しかねぬ憎悪愛——それというのも《怒りの気遣い》は、今や憎悪愛に変わってしまったのである——それにほとんど伝達不可能とも言える分裂状態から作り出された礫岩である。逃走の有り得ぬ地獄、途方もない幻影と幻覚のミノスの迷宮なのである。これはドイツ語における最も完全な《心理劇》、すなわち名詞的隠喩が写実的表現法を遥かに凌ぐ古典的表現主義の一文学であり、われわれが述べた10年間に誕生する黙示録的世代の最も純粋な表現である。これらの場面のいくつかを手に取りさえすれば、あの世代の事情はいかなるものであったかがわかるであろう。

この戯曲がきわめて大規模なものだったのか、あるいは『啓示と没落』の単なるスケッチなのかはわかりかねるが、その執筆後、半年でトラークルは死去した。彼の死後、グレーテは完全に足もとの大地を失ったと言われている。1915年と1916年には、インスブルックとミュンヘン（ノイフリーデンハイム）で麻薬を断つ治療を受ける羽目になった。そしてフィッカーがその後も寛大な保護を加えたものの、彼女にはもはや支えとなるものがなかった。通りすがりに故郷の町で職を求めながら、フィッカーがその大隊とザルツブルクを行軍していた日（それは1915年の初秋のことだったろう）、彼女はドレスデンのブッシュベックに宛ててこう手紙を書いた。どこかで職につくことは困難でしょうし、《更に一層確かなことですが、私が離婚した女であるということで、多くの人が感情を害するでしょう》。夫に見捨てられ、後にはベルリンで心的危機と物質的危機から、別の危機的状态へ落ち込んだ。ベルリンの知人たち、ヘルヴァルト・ヴァルデン（《嵐》の発行者）、カミル・ホフマンその他の者も、最終的に彼女を救い出す状態にはなかったように見える。

陽気に振る舞っていたと言われるある集いのあと、彼女は隣室へはいり、拳銃自殺を遂げた。1917年9月21日のことで、ランゲン夫人は25歳になっていた。

トラークルにとって、血は《まったく特別の果汁》だったように見える。血は彼を祖先伝来の氏族と、先祖世界と全種族と結び付ける媒介物だった——この血の概念には、何も生理学的なものはなく、むしろ魔術的古代の何か操作的なものなのである。血という言葉は、彼の想像力の中では人目を引くほど繰り返し出現する。そしてその度ごとに、大きな比重を置かれ使用される。何か宗教的なこと、何か殉教者の血の証明といったものを内包する厳粛さを伴って。それでもやはり《血》はトラークルの場合、形而上的な意味で理解しようとするれば、宗教的あるいはロマン的語彙ではなく《種族的》語彙なのである。新聖堂騎士ランツ・フォン・リーベンフェルス（この男は理論的には、太陽神のゲルマン的青・ブロンド・種族の養育者にもかかわらず、ユダヤ人カール・クラウスを熱烈に崇拝した）、トラークルの詩に微かな対応を見せている。

そうだからこそ、詩人はグレーテへの関係を血に対する罪として、呪うべき神秘として理解していたことが明らかになる。種族的なものを意味する限り、血は同じ種族の、自分の氏族の本性に彼を結び付けている鎖の重さだった。そのことについてマールホルトはこう述べている。《ひょっとするとトラークルは、この妹に引きつけられる存在の中で、〈荒々しい種族の暗い愛〉の中で、いつも彼を重苦しくさせていた墮落の呪いを初めて強く感じたのかもしれない。》トラークルは、グレーテのような自由で宇宙的精神には決して理解できぬような流儀で苦しみながら、この結びつきの不自然さを意識していたのである。

妹とトラークルの近親相姦的結びつきについて語られる場合、一種曖昧な証明だが、たいていソネット詩行、〈公園で震えながら兄妹は見つめ合う〉(『悪の夢』)が、しかしまた『血の罪』が特に好んで参照される。この詩は『聖者』とほぼ同時期に成立したもののようだから青春詩作品の最も早い時期に属する。近親相姦の正確な訳は血の恥辱である。トラークルは血の罪について語っているのである。この語には、悪や罪業との彼の血縁的結びつきが表現されている。

血の罪

私たちの接吻の褥に夜の帳が降りる。
どこかで囁く声がする おまえたちのいずれが罪を引き受けるのか？
不埒な欲情の甘さになおも震えながら
私たちは祈る 私たちをお許し下さい マリア様 あなたの慈しみで！

水盤から情欲の香りが立ち昇り
私たちの青白い罪の額を媚びるように取り囲む。
重苦しい気配に疲れはてて
私たちは夢見る 私たちをお許し下さい マリア様 あなたの慈しみで！

だがジレーネの泉が大きくどよめく
そうしてスフィンクスが私たちの罪の前に暗く聳える
私たちの心は又しても罪の想いに高鳴る
私たちは啜り泣く 私たちをお許し下さい マリア様 あなたの慈しみで！

しかし更に早い時期の他の痕跡も存在する。例えば青春詩の同じ選集の三つの『譚詩』のうちの、最も短いものである。

重苦しい庭に夜が訪れた。
私たちはお互いに沈黙した それが私たちを戦慄させた。
その時から私たちの心は目覚めた
そうして沈黙の重荷に耐ええなかった。

あの夜 星はきらめいていなかった
そうして私たちのために祈ってくれる者は誰もいなかった。
魔神だけが暗闇の中で笑った。
何もかも呪われてあれ！ そのとき行為が成就した。

これらの詩の芸術的価値は小さいが、証言としての価値は大きい。告白的後期詩、特に『啓示と没落』で演じられているように、最初の私的な体験からすべてを包括する出来事に至るには、一本の広い道があり、二人の愛する者たちは、自ずと苦悩をもたらす真の地獄火のこの道を辿ったのである。〈苦悶に蹣跚とする聖杯〉を、二人は最後の一滴まで飲み干さねばならなかった。ルートヴィヒ・フォン・フィッカーがトラークルのミューラウ墓地の追悼の辞で妹を名づけたように、《苦痛の契りを結んだ女》は、この地獄の中で兄に対し、時折アルシオンの輝きをも見せて、《憂鬱の星》のように、ある

いは彼の本性の美しい反射光として光るのである。恐らく、詩『私の妹に』の中で最も清純な光を放っているであろう。この詩は、次いでより大きな表題『妹に』となって『ロザリオの歌』へ採り込まれた。

おまえの歩いていく所は秋になり夕暮れとなる
樹々の下で鳴り響く青い獣
夕暮れの孤独な池よ。

微かに鳥たちの飛翔が響き
おまえの弓なりの眼差しにかける憂鬱よ。
おまえのかぼそい微笑みが鳴る。

神はおまえの臉を弓なりにしたもうた。
星たちは夜には 聖金曜日の子よ
おまえの弓なりの額を探すのだ。

ここでは聖金曜日の子グレートルは、この世のものとは思われぬ、鳴り響くような静寂の中へ寝かされている。しかし生きて暮らし続けた限り、二人の兄と妹は、〈折れた剣を心に〉抱いていたのである。